

Title	神経性過食症患者に対する自尊感情向上プログラムの開発と評価
Author(s)	竹田, 剛
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/56018
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏名 (竹田 剛)

論文題名

神経性過食症患者に対する自尊感情向上プログラムの開発と評価

論文内容の要旨

食行動の異常を中核症状とする摂食障害において、自身の体重や体型のあり方に対する評価が著しく低いことは治療場面でもよく取り上げられる。しかし患者らは、痩せに関わる側面以外の自分のあり方についても低く評価していることが知られている。つまり多くの摂食障害患者には、自身を全体として“これでよい (good enough)”と評価する感覚(Rosenberg, 1965)である自尊感情の低さがみられると繰り返し指摘されてきた。近年でも、神経性過食症の発症因子としての側面・調整変数としての側面・維持因子としての側面のそれぞれにおいて、新たなモデルや介入方略の提案がなされている。特に近年提案されている介入プログラムは、自己スキーマや認知のあり方へ介入するものが一般的である。その一方で、先行するプログラムを本邦で実践する上ではいくつかの検討点がある。第一に、先行プログラムが介入対象としているものは、自己についての抽象的な要素である点がある。個人のパーソナリティには様々な水準があると指摘されており、個人がどのような人であるかに関する具体的な記述の水準(自己概念)や、個人が生きる意味を含んだ物語の水準(自己物語)があるとされる。神経性過食症患者がもつこれらの水準を広く捉え、それらを統合したプログラムを開発することによって、プログラムのもつ理論性や効果が高まると考えられる。第二に、欧米と本邦では神経性過食症や自尊感情のあり方が異なる点がある。従って、本邦の神経性過食症患者の自尊感情のあり方についての詳細な検討を行うことが重要である。

本研究では上記の問題意識のもと、本邦の神経性過食症患者の自尊感情を向上するプログラムを開発し、その効果を検証する目的で、8つの研究を行った。研究1(第二章)から研究5(第六章)はプログラムの治療機序を検討したものであり、研究6(第七章)から研究8(第九章)はプログラムの開発と評価を行ったものである。

まず研究1では、自尊感情の向上に関わる特性であるレジリエンスに着目し、その概観と発達の検討を行った。神経性過食症患者の持つ自己概念は多様であるとともに、患者の抱える様々な困難さを含んだものになる可能性がある。それらへの対処を検討する上で、レジリエンスの持つ機能が有用であると考えられたためである。加えて近年では中年期の患者が増大しているため、ライフステージ別のレジリエンス機能を把握しておくことはプログラムの汎用性を高める上で役立つと考えられる。以上の観点を踏まえ、青年期175名・成人初期172名・中年期92名を対象とした質問紙調査を行った。因子分析の結果、レジリエンスは『自分の能力への信頼』・『目標への前進』・『精神的負担の緩和』の3つの機能から構成されることが示された。また成人初期・中年期には青年期と比べて、『目標への前進』因子の機能が異なることが示された。自尊感情が低いままに維持されている神経性過食症患者に対しては、これらの考察を活かした介入を組み立てることが肝要であると示唆された。

研究2では、神経性過食症患者に特徴的な自己概念を明らかにする目的で質的調査を行った。8人の神経性過食症または過食性障害の患者に20答法を実施し、KJ法を用いて回答のカテゴリ化を行った結果、ポジティブ語使用-ネガティブ語使用の軸および他者存在-不在の軸の2軸が得られた。また自己概念の重要性評定尺度の結果から、ネガティブ語使用・他者存在の領域とポジティブ語使用・他者不在の領域の自己概念の重要性が高いことが示された。これらの結果より、自己をネガティブに語る傾向や他者視線を意識する自己が、患者の自己のあり方や自尊感情の形成に対して影響力をもつことが考察された。

続いて研究3では、研究2で示された自己概念の背景にある自己物語の抽出を試みた。研究2の協力者に対して、20答法の回答についてのエピソードを聴取するインタビュー調査を行い、得られた語りを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析した。その結果、患者は【「食」関連】【自己存在・他者存在】【関係性】の3領域に関する自己物語を有しており、かつ各領域に含まれる自己物語は複雑に関係し合っていることが明らかとなった。各領域のもつネガティブな面、および自己物語の複雑性から抜け出すことが困難である点から患者の自尊感情は低い状態にあると考察された。

また研究4では、神経性過食症患者の自己概念の主観的強度と自己評価を測定する質問紙の開発を試みた。これは後に行う効果研究で用いる指標を作成する目的に加え、主観的強度と自己評価および自尊感情の関連性について量的に検討を行い、プログラム開発の示唆とする目的で実施した。研究2の結果を踏まえて項目を作成し、大学生172名の回答データを因子分析した結果、『こだわりをもち邁進する私』や『内閉的な私』などの6因子にまとめられることが示された。また尺度の信頼性・妥当性が確認された。加えて第六因子『落ち込みやすい私』因子などが自尊感情や症状とネガティブな関係を持つことが示された。これらのことから、プログラムでは複数の自己概念を視野に入れ並行して扱う必要があると考察された。

研究5ではこれまでの結果を踏まえ、神経性過食症患者の自己についての統合的な理解を試みた。研究2と研究4でまとめられた自己概念が、研究3で示された自己物語によってどのように語られているのかについて検討を行い、各自己概念がどのように形成され、またどのような影響をもつのかについて考察を行った。その結果、各自己概念に対する介入の要所が明示された。特に「よい他者評価の希求」自己物語は全ての自己概念の形成に関与しており、また『落ち込みやすい私』自己概念は他の多くの自己物語や自己物語を有することの帰結として生じることが示された。

以上の結果を下地とし、研究6では神経性過食症患者の自尊感情を向上するプログラムの開発を試みた。治療目標としてworthinessおよびcompetenceの自尊感情の双方を向上させること、また神経性過食症症状の改善も視野に入れることが検討された。治療機序としていくつかの自己評価を向上させる支援を行うこと、または自己評価が向上しやすい形に自己概念を修正することが検討された。治療過程には研究2で示された他者存在-不在の軸を活かすことが検討され、まず他者不在の極に近い自己概念から扱っていくことの意義が考察された。治療手段および治療技法としてはケースフォーミュレーションや心理教育を実施すること、また集団療法の形式をとって参加者同士が受容し合える機会を作ることが有益と考えられた。時間的な枠組みとしては本邦の神経性過食症治療の現状を考慮し、隔週で全6回、各回2時間と設定した。以上の枠組みを基に各回で取り扱う内容を検討した。

続いて研究7では、プログラムの量的効果について検討を行った。3名の神経性過食症患者を対象としてプログラムを実施し、参加前後における指標の変動を検討した。その結果、自尊感情については明確な効果が得られなかったものの、自己評価に関してはfollow up時まで改善効果が維持されていた。加えて、神経性過食症に関する認知および神経性過食症症状についても一定の効果が確認された。また一方で、自己概念の主観的強度については大きな変動がみられなかった。このことは、協力者は依然として自己概念を強く抱いているものの、一方でそういう自分を評価できるように徐々に変化したことを示している。以上の結果を踏まえ、神経性過食症患者の自尊感情を向上するにあたっては「各々の自己概念は受容できるものである」というモデルを提示することが有効であると考察された。

研究8では、プログラムの質的効果について検討を行った。特に「プログラムへの参加を通して経験される、自尊感情や症状についての変化のプロセスを明らかにする」ことを目的とした質的研究を行った。研究7と同一の協力者に半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、自尊感情の向上に関する『「このままでいい」と感じられる瞬間をもつ』語りや、神経性過食症症状の改善に関する『日常の中で自身の変化を感じる』語りが示され、プログラムのもつ一定の効果が示唆された。この効果は、患者が抱える“あきらめ”に質的变化が起きることによって生じると考察され、ケースフォーミュレーションによる『集団療法に前向きに取り組む』ことと、体験共有による『メンバー間で共有し合う体験をする』ことを通して『前向きにあきらめる』へ至ることの重要性が考察された。

以上を通して神経性過食症患者の自尊感情を向上するプログラムを開発し、自尊感情の向上には明確な結果が得られなかったものの、自己評価や症状の改善については一定の意義を確認した。プログラムの開発に当たっては、本邦の患者の自己について統合的な理解を試み、また研究方法としても技法間・技法内トライアングレーションの手法を用いたことが効果に結びついたと考えられる。加えて幅広い領域に関わる自己概念を包括的に扱ったこと、“あきらめ”に関する質的な変化が生じたこと、それらを様々な治療技法を組み合わせることで実現したことの意義が考察され、神経性過食症治療の統合や再編を促しうるというインパクトをもつことが考察された。さらに神経性過食症患者にとっての自尊感情向上の意味について考察を行い、自尊感情に関する定義が幾度も統合し推敲されながら深まってゆくものであることが示唆された。最後に本研究の今後の発展の方向性について述べ、本論文のまとめとした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (竹 田 剛)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	准教授 佐々木淳
	副 査	教授 井村修
	副 査	教授 老松克博
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>食行動の異常を中核症状とする摂食障害において、自身を全体として“これでよい (good enough) ”と評価する感覚 (Rosenberg, 1965) である自尊感情の低さがみられると繰り返し指摘されてきた。近年でも、神経性過食症の発症因子としての側面・調整変数としての側面・維持因子としての側面のそれぞれにおいて、新たなモデルや介入方略の提案がなされている。本研究は、本邦の神経性過食症患者の自尊感情を向上するプログラムを開発し、その効果を検証する目的で、8つの研究を行っている。</p> <p>基礎的なメカニズムに関する第1部では、まず研究1において、自尊感情の向上に関わる特性であるレジリエンスに着目し、その概観と発達の検討を行っている。研究2では、神経性過食症患者に特徴的な自己概念を明らかにする目的で質的調査を行い、研究3では、研究2で示された自己概念の背景にある自己物語の抽出を試みている。また研究4では、神経性過食症患者の自己概念の主観的強度と自己評価を測定する質問紙の開発を行っている。研究5ではこれまでの結果を踏まえ、神経性過食症患者の自己についての統合的な理解に至っている。</p> <p>臨床実践に関する第2部では、第1部を下地とし、研究6において、神経性過食症患者の自尊感情を向上するプログラムの開発を試みた。続いて研究7では、プログラムの量的効果を確認し、研究8では、プログラムの効果の質的な側面から検証している。</p> <p>以上のような取り組みから、神経性過食症患者の自尊感情を向上するプログラムを開発・実施し、自己評価や症状の改善について一定の意義があることが確認された。プログラムの開発に当たっては、本邦の患者の自己について統合的な理解に至った上で、研究法の側面においても技法間・技法内トライアングレーションの手法を用いたことが、実施後の効果に寄与したと考えられる。加えて幅広い領域に関わる自己概念を包括的に扱ったこと、“あきらめ”に関する質的な変化が生じたこと、それらを様々な治療技法を組み合わせることで実現したことの意義が考察されており、神経性過食症治療の統合や再編を促しうるインパクトをもつものである。さらに、本研究のターゲットであった神経性過食症患者にとっての自尊感情向上の意味について再考を行っていることから、本研究の構成のよさやバランスのよさがうかがえる。</p> <p>以上より、本論文は、博士 (人間科学) の学位授与にふさわしいと判断された。</p>		